

辨榮
聖者

道
詠
集





印
夏
南
山
樵
加
高
定
應
記
佛
陀
謹
書



釋迦牟尼佛

釋迦牟尼佛常にこゝろに忘れずはこの身を鷲の山といふらめ

跋羅駄闍尊者

なにも事もなく吹く風にまかすればこゝろにかゝる浮雲もなし

迦諾迦伐蹉尊者

塵ほこりなき身なからいかなればうちばらはむと非子もつらむ

諸迦跋藍駄尊者

たれもみな己かこゝろの經卷をほとけとまてのおしへなりけり

蘇頻陀尊者

枯れし木の花(想)はさかひ(光)す空蟬のもねけし聲のいとすゝしき

迦哩尊者

ほとけとはたかむすひたるしら糸のくりかへしみや賤のおたまき

諾矩羅尊者

いまはまたこゝろにかゝる花もなしおもひのまゝに風吹きすさめ

弗多羅尊者

厭ふへき生死もなきにいかなればれかふ涅槃のみとむへきやは

跋陀羅尊者

かり山のたけくしけるけものよりふせきたきは我むれの虎

戌博迦尊者

いかばかり氣張てみてもうたかたの泡と消へゆく身とはしらすや

注荼半託迦尊者

天の原ふりさけみればいやくものかきりしられぬ我こゝろかな

羅怛羅尊者

量りある己かはからひうちすてゝ本來空に入るそ易けれ

阿氏多尊者

さてもくおもひ(へ)ばおもふはてもなくあやしきものはこゝろなりけり

半諸迦尊者

ひとをのむをろちといふもよそならし己かこゝろのあらはれとしれ

那伽犀那尊者

こゝろなき身にもこゝろはあふれ出て踊るはかりにうれしかりし乎

伐那婆尊者

さとりとてほかにこゝろのみちもなし迷はぬまてのものまゝそも

因揭陀尊者

振り鳴らす杖のひゝきにたれもみなこゝろのれむり疾くさめよかし

十六應眞の跋に

ひまらやの峰よりもなほけたかきはさとりしひとのこゝろなりけり

無量光

量^{はひ}りなき三世^{さんよ}の佛^{ぼつ}のかずくは

たゞみひとりのわかれなりけり

無邊光

世^よを照^てらすさとの海^{うみ}はそこひなく

またほとりなき光^{ひかり}なりけり

無碍光

世^よの人の心^{こころ}を照^てらすみひかりは

いかなるものもさへぬなりけり

無對光

たくらぶるものこそなけいと尊き

わがみほとけの照らす光に

炎王光

いかばかり罪の薪はつもるとも

焼きつくすなり彌陀の光は

清淨光

見るにつけ聞くにつけても染みやすき

心をきよき光とぞする

歡喜光

歡びの光にあはゞとことほに

のどけき春の心地こそすれ

智慧光

みほとけのさとき光に照しみよ

みな實相のすがたなりけり

不斷光

断えなくば海水さへもくみつくす

何ごとかそもならざらめやは

離思光

眼にみえぬ思ひにもまた及ばぬは

光にふれし心なりけり

無稱光

うれしともまた樂しとも言の葉に

及ばぬ光にあふ心地かな

超日月光

月も日も及ばぬ人のこゝろまで

照らすほとけの光なりけり

擲 法

朧^{おぼろ}夜のこゝとさやかに見^みへねども

月^{つき}のかたにぞあくがるゝかな

こゝをぞとさやかに今^{いま}は見^みへねども

月^{つき}のかたにぞあくがれにける

精 進

のぼりゆくつかれも今^{いま}は覺^{おぼ}ほへじ

高^{たか}ねの月^{つき}を見^みまくほしさに

すゝみゆく道^{みち}の遠^{とほ}さもおぼゝえじ

高^{たか}峰^ねの月^{つき}の見^みまくほしさに

呼ぶ御名に心の玉もみがゝれて

みだの光は映ろひにけり

喜

まちいづるほのかに山の端にほふ

月見るときはうれしかりけり

輕 安

いまははたこゝろにかゝる雲もなし

照る月かげに我を忘れて

おぼろ夜のさやかに月は見へねども

今宵はこゝろのどけかりけり

定

さやかなる月つきにこゝろもすみぬれば

光ひかりのほかに我われなかりけり

照てる月つきに我われをはなれて見みるときは

月つきこそおのがこゝろなるらめ

我われながらわれともいまはおもほえじ

照てる月つきかげにこゝろすまして

月つきを見みて月つきにおもひのすむときは

月つきこそおのがこゝろなりけり

月をみて月に心のすむときは

月こそおのがすがたなるらめ

月かげに我をはなれてすみぬれば

こゝろにかゝるうき雲もなし

念

さゝなみにすがたはちとにくだけても

月の光の映らぬはなし

念佛三昧

御名をよぶ聲にこゝろの雲はれて

さやかに見ゆる月の面かげ

迷まよひ子この闇路やみぢにあるをいかにもして

御許ごきに呼よばふ聖旨みづかなりけり

呼よびませる御聲みこゑはあれど聞えぬは

迷まよひの眠ねむりふかければなり

子こを思おもふミオヤのなさけ深くして

よほふる聲こゑに驚おどろきにける

昔むかしより三世さんよのほとけがかはるがはる

よべどもさめぬ眠ねむりふかくて

親は子をかくばかりまでおもへども

子はなど親を慕はざるらん

大ミオヤのみむね安らふことなけん

さまよふ子等のあらんかぎりは

宇宙間に塵ばかりだも大ミオヤの

めぐみゝたさぬ處はなからん

かくばかりみめぐみ深き大みむねに

子はいかにしてむくいまつらん

あさましき己がはからひうち捨てゝ

ただ大みむねにまかせまつらん

いかばかり巴^{おの}がはからひわづらふも

いたづらごとゝ今は知^しりける

兎^うや角^{かく}と思^{おも}ひわづらふこともなし

ただ大^{おほ}みむねにまかせてし身^みは

大^{おほ}ミオヤのいますと知^しらで闇^{やみ}の世^よに

かぎりも知^しらずまよひ來^きしなり

ミオヤさへ知^しらぬ身^みながらいかなれば

もの知^しりがほに世^よを過^すしけん

大^{おほ}ミオヤにむかひて見^みれば露^{つゆ}ほども

我^わ力^{ちから}とて無^なかりしものぞ

大ミオヤにまかせしからはいとやすし

子をおもはざるおやは無ければ

をさめますやいかたと今はわづらはじ

ただ大ミオヤのみはからひのまゝ

我ばかり罪ふかき身はあらじとは

思ひながらもこりもせぬわれ

はぢらひて悔ひあらたむる夕には

罪も燈火の油とはなる

たらちねのよぶとは知らでみどり子の

なく聲にこそ乳房ふくめつ

なむとよぶ子の啼聲なきこゑにあみだ佛ぶつの

恩寵めぐみの乳ちはふくめますなり

慈悲じひのみかは見みたさは飛とびたつばかりなれど

まだ逢坂あさかの關せきはゆるさじ

いつよりかおもふ神こころかしら雲くもの

あなたの空そらにあくがれにける

あくがれて御名みなはよべども雲くもはれて

いつ見みまつらん月つきのおもかげ

眠ねむりさめやみよはあけて大おほミオヤの

とこよの春はるはのどけかりけり

天地あめつちのよろづのそなへたまはるも

子等こらを育はぐまんみむねとはしる

かくまでにみめぐみ深ふかき大おほミオヤに

子こはいかにして報むくいまつらむ

草くさの上うへにおく露つゆまでもみめぐみと

露つゆばかりだもおもはざりけり

〇

聞きくならく奈落ならくの底そこのもくすまで

みなビルシヤナのその身みなりしと

野のにさける花はなさへオヤの子こをおもふ

こゝろづくしの色いろにやあらん

心こころして聞きけば空そら吹ふく風かぜさへも

甚じん深じん微み妙めうの法ほうのひゞきぞ

驚おどろの山やまたかねの音おとはたへにして

庵いほ松しょう風ふうにひゞきかよひつ

日ひ々々にあらたに出いづる朝あさ日ひかけ

むかしながらの光ひかりなれども

みほとけの月さやかなる心には

迷の雲もみものなりけり

永しへに照るみ光の中ながら

知らぬは己がやみにぞありける

水すまばかならず月はやどるなり

なぞみほとけを疑ひやする

人なみの眼にて見ば十萬の

億土のかしこも人の世ぞかし

迷へるも悟れるもまた善惡も

心ひとつの向け方にして

南無阿彌陀一聲ごとに十萬億

なに遠からむ行き通ふなり

月を見る眼の月に入りぬれば

月も眼に入りにけるかな

十萬の億のかしこに引き出され

ますく遠き心をぞしる

阿彌陀佛と尊きかたをおもほへば

おもふ心ぞいやたふとけれ

みほとけをおもふ心が眼に見へば

さながら聖き佛なるらん

かたちなきすがたもあらぬ我心わがこころ

おもへば佛ほとけのすがたとはなる

真心まごころに内うちと外そととてなかりけり

十萬億まんおくもへだてやはする

親おやと子この心こころにへだてなき時は

いづこも無爲むゐのみやこなりけり

死ししてのちゆくみちにてはあらざらん

生死しやうじはなれし無爲むゐの都みやこは

大ミオヤの永とほの壽いづもにまかせては

我有わうや無むやの煩わづらひもなし

極樂をはるけきほどゝおもひにき

ミオヤの光しらぬむかしは

とこよなる無爲のみやこはよそならず

光のなかにすむこゝろかな

あみだ佛と心をほとけにうつせみの

もぬけし我は佛なりけり

○

あふぎみれば數かぎりなき星はみな

一のひとみの中に入るなり（終世）

十萬億はるかにてらす日の光

念のこゝろのうちにまします

まことには色なき水もいかなれげ

かくしろたへの雪と見ゆらん

墨の繪にうつせる瀧の音までも

甚深微妙般若婆羅密

奥ふかき心にのみと思ひしに

庭の花さへさとひらきつ

宇宙は圓かに照らすかゞみにて

よろづはなべて影像にありける

浪ごとにみな我がほに立ちほこる

一の海の水としらねば

みふところのなかともしらでねむり子は

生死の夢にうなされにけり

○

いや高く心のたこは上るなり

御名よぶ聲の風のまに／＼

いまはたゞ心にかゝる雲もなし

きよきみむねの中にまかせて

吹きすさむうき世の風はあらばあれ

我はみおやのふところにすむ

やがてゆく西のかしことおもひにき

こゝも樂しきみ國なりしを

つゝむともおのづとおもにあらはるれ

慈悲のみむねにあへる心は

宇宙に神のかくせる秘事も

さとりは三まやのなかに有りけり

己がむね静めて深くおもほへよ

こゝもさながら無爲のみやこそ

大ミオヤの光をよそにごくらくを

求むる人の實にはかなし

み名をよぶ聲に心のあらはれて

あみだほとけのすがたとはなる

あみだ佛となふる聲ぞなつかしき

わがたらちねの御名とおもへば

世を照らす法の燈火ゆく末に

傳へて慈父の恩に報いむ

あくがるゝ御名はよべども雲はれて

いつ見まつらん月の面影

み名をよぶ聲に心の水すみて

月のおもかげやどりぬるかな

大ミオヤは慈悲の眼を子にそゝぎ

子は南無佛と親を仰ぎつ

天と地は親と子にてもちきりの

はゞかりもなき心安さよ

南無と呼ぶ聲にあみだは眞に向ふ

おもひあぐればありがたきかな

有難しげにありがたしありがたし

慈悲のミオヤを仰ぐおもひは

大ミオヤの慈悲の面かげおもほへば

融け入るばかり樂しかりけり

娑婆の苦も今は苦しともおもほへじ

ミオヤに永久になぐさまる身は

大ミオヤの慈悲の笑顔をおもほへば

よろづのこともうち忘れけり

私のおのがはからひうちすてゝ

たゞみこゝろにしたがへよかし

迷ひぬる雲にかくれて見へぬなり

驚のみ山のありあけの月

三の身と分ちて御名は聞きしかど

たゞみひとりのミオヤなりけり

みひかりの照りわたりたる大そらを

たゞ大空とのみな思ひそ

はかなしやみおやのみむね我が身にも

かゝると知らであだに暮しつ

何處にかひかりわたらぬくまやある

心して見よ御名を唱へて

内と外に充ちわたりたるみひかりを

己がこゝろの奥に求めよ

我てふる無明の闇もあみだぶの

光の前にあけはるゝらん

光明の名を稱へて一心に

はげみてつひに我つくるまで

子をおもふミオヤのみむね知りたくば

なむあみだ佛のこゝろとはなれ

あくがれて御名をよばへば眼のあたり

慈悲のおもかげあらはれぞする

阿彌陀佛を思ふころのますかどみ

かぎりなきまで照りわたるかな

今はたゞ我ものとはなかりけり

阿彌陀佛にさゝげてしかば

今はたゞ我心とてなかりけり

阿彌陀佛のみむねのみにて

うす絹につゝめる如く春の夜の

おくゆかしくも匂ふ月かな

ねてもまたさめてもおもひ忘れ得ぬ

あはれ夢にも見たや阿彌陀佛

折々のおもひの雲をなげくらん

さへぬ光とまだしらぬ身は

御名をよぶ聲にいつしかすみわたる

こゝろにやどる月の面かけ

きのふまで長夜の春とおもひしに

しばしむすびしみちか夜の夢

大ミオヤの慈悲の面かけおもほへば

融け入るばかり樂しかりけり

あみだ佛のさへぬ光を心とせば

我てふものゝかげもとどめす

きよらけき無爲のみやこに大ミオヤの

みむねのまゝに任せてぞゆく

世の中の風のまに／＼さすらひて

無爲のみやこに遠ざかるかな

すこやかな身のほどにこそとめかし

ときはにほふ花の御國を

永しへの光のなかに復活り

聖きいのちにならまほしけれ

仰ぎても天にかぎりなく伏してまた

底なき國に住める我かな

永遠の大我に活ける我なれば

我も盡きせぬ命なりけり

大ミオヤのすべてはいまは我物と

賜はることもうれしかりけり

かちどきをあげて歸へらんかの國へ

雲のかつらをかざしとはして

○

濱千鳥しるべにのこすあとなくば

世の人みちをふみまよふらむ

あふりかの山の奥にも聞ゆらむ

風の音さへ般若波羅密

あめりかの山のおくにも聞ゆらむ

その風の音般若波羅密

○

一心しんになむあみだ佛ぶつといふ人ひとは

これぞほとけのあとのみほとけ

ひたすらにあみだ佛ほとけをおもふなら

ころそのまゝほとけなりけり
(是心是佛)

あみだ佛ぶつに融合かふごう信仰しんぎやうはほとけなり

主我われこそいつもまよひとぞしれ

主我われといふ罪惡つみとが生死ふかき身を犠牲すてて

ただ歸托たのめかしみだの恩寵めぐみを

善惡ぜんあくもともに主我しゅがなる惡あくなれば

滅殺すててぞ歸屬たのめみだの恩寵めぐみ

徳^あ號^なの父^{ちち}光^{ひかり}明^りの母^{はは}の恩^{おん}寵^{ほう}にて

いや育^{はぐ}むなり聖^み種^{はとけ}の王^み子^こ

一^{しん}心^にになむあみだ佛^{ぶつ}のこゝろこそ

まことに彌^み陀^だのみむねなりけり
(是^{こゝ}に佛^{ぶつ}作^{つく})

阿^あ彌^み陀^だ佛^{ぶつ}にまかせてからはほとけには

ならうがまゝよならぬがまゝよ

○

七重八重さけるも冬のはだか木も

おなじみやまの櫻なりけり

ゆく末も今も此まゝ南無あみだ

ほとけとともに永遠のいのちぞ

ゆくもまたかへるも今はなかりけり

あみだほとけのなかにすむ身は

あらたのし無爲泥洹のみやこには

のどけさ有無をはなれてしかば

佛とは九界にかゝる雲はれて

永遠にかゝやく心なりけり

あみだ佛ぶつと無爲むゐのみやこに住すむ身みにも

有爲うゐのなみかせ立たちさはぐかな

みほとけの月つきさやかなる心こころには

おもひの雲くもも光榮くわうゑいをなす

燈臺とうだいのたつきもなくて闇やみの夜よに

浪路なみぢを走はしる船ふねのあやふさ

こゝかしに形かたちはしばし別わかれても

心こころは同おなじみひかりのなか

にせものゝかたちばかりを我われとおもひ

まことの我われをしる人ひともなし

○

大^{おほ}ミオヤの慈^じ悲^ひの衣^{ころも}におほはるゝ

心^{こころ}はとはにあたゝかにして

白^{しろ}妙^{たへ}のきよき衣^{ころも}をまとひなば

染^そめまじものよいよ心^{こころ}して

活^す業^{はひ}にはげしくせめぐ世^よにありて

忍^{しの}辱^ぶのころもぬがまじものよ

世をよそふうそのかざりをぬぎすてゝ

誠ひとへの心すゝしき

ミオヤよりうけたるまゝのまごゝろは

きのみきのまゝあかつきもせじ

法悦の妙味をかてとする人は

心はひろく體ゆたかなり

たましひのかてだになくば何かせん

たとひからだはこえふとるとも

我身をもこゝろもともに融け合うて

ミオヤのこゝろ我こゝろかも

今はたゞ世に恐ろしきこともなし

大御ふところにすむ身なりせば

常に照る光の中に住む人の

こゝろはとはにのどけからまし

なやましき心一つをすみかへて

たのしき親のふところにをれ

あみだ佛と共にすむ身は法界が

わが胸なるか胸がみそらか

世の中に鬼てふものはなしといふ

己が心にすむとしらずに

きのふまで鬼の住にし胸殿も

けふみだ尊の御堂とはなる

極樂を西にありとはいふものゝ

さとる心の我名なりけり

ゆくすゑのみくにとのみなおもほひそ

いまの心のすまひなりせば

かぎりなきいのちのおやともろともに

不生不滅のみやこにぞすむ

わがものとおもへばあだにすごすらん

賜^{たまひ}なりしこのいのちをば

いさみつゝ今日^{けふ}のつとめをはたさなむ

我が大^{おほ}ミオヤのおほせなりせば

つみといふつみ多^{おほ}けれど大^{おほ}ミオヤに

そむくがつみのもとにぞありける

のちの世^よはみむねのまゝにまかせてん

今日^{けふ}のつとめをわれははたして

大^{おほ}みむねにまかせぬる身^みのつとめをば

ミオヤとともにすゝみゆくなり

天つちのおなじめぐみにつながれし

ほそき小蟲の玉の緒なれば

いまはたゞ心にかゝる雲もなし

きよきみむねのまゝにまかせて

つゝむとも己が心のそのまゝは

阿彌陀佛のしろしめすらむ

我がものともに着することなくば

宇宙全體わがものにこそ

君とわれふたりとだにもおもほへじ

ひとつみむねを心とはして

殊勝しゆしやうげに珠數じゆずつまぐりて高念たかねん佛ぶつ

心こころの鬼おにをさていかにせむ

大宇だいう宙ちゆうを盡つくして己おのが物ものなれば

是これと彼かれとに執着しゆうぢやくもせず

人ひとの爲ためめ世よの爲ためなればつくしてん

高たかきのぞみに我われを忘わすれて

かぎりなきみのりの藏くらにかぎりなく

まなばんものよこゝろおこして

はてしなくかぎりもしらぬ天空に

かけほしきまゝかけまはるかな

いさぎよきこゝろざしよりなすわざは

くるしみさへも樂しかりけり

ミオヤより受けしまごゝろまもりては

惡魔のためにうばはれなゆめ

摩訶般若波羅密の船にはやてふく

薩般若のかたにむけてさをさせ

けはしくも忍ぶの山路越えゆかば

いと安らけき道に出づらめ

火にやかれ鎚に打たれてくろがねも

くろがねをきるつるぎとはなる

ぬす人のすみ家とかつて知らざりき

いと怪しげの我胸のうち

機あらばしのび出でてはいたづらを

なすものゝすむ胸にてぞある

ともすれば悪魔の虜となる己が

こゝろ己にうら恥かしき

悪魔とてまことは正體なきものゝ

光のかげし心なりけり

慾に目のなき煩惱のほしいまゝに

ゆくへのほどぞ恐ろしきかな

ぬす人の棲家と知らば我胸を

かくまで心ゆるすまじきに

再びはかへらぬけふと知りながら

なほいたづらに過しやしつらん

禍をのがしてかしと祈らざれ

耐ふる力こそあらまほしけれ

あきらけき聖旨の照すみかゞみに

日にいくたびかうつしてぞみむ

大^{おほ}ミ^ミオヤの命^{いのち}の義^{つとめ}務^む果^{はた}さずば

人^{ひと}と生^{うま}れしかひやなからん

身^みと口^{くち}と意^{こころ}のわざにあらはるれ

聖^{きよ}きみむねにあへるこゝろは

伸強一切行者等一心唯信佛語
不顧身命決定依行佛道捨身即
捨佛道行者即行佛道去處即去
是正隨順佛教隨順佛志是名隨
順佛願是名喜佛弟子

佛よしもおれしのかのめをむ
すのこころをむ

聖きみむね



むだやことを云ふ口いらぬ

たと其口で南無阿彌陀佛

南無のかんと言ひわけよりも

やはりかはりに南無阿彌陀佛

南無とらるるもあなまをたのげまはるるもすれ

南無とらるるもあなまをたのげまはるるもすれ

衆生如子所懷懷衆一子而育之
佛之上也衆生を懷衆一子とす



佛地釋教 圖四

本願力

大ミオヤが子らを撮めて泥洹の

都に救ふ聖旨なりけり（光仰がむ）

太陽の草木をみのらせるごとく

聖旨にをさむちからなりけり

日の光稻穂をみのらせるごとく

ミオヤの光に我はみのらん

大ミオヤは子らを撮めてみづからと

おなじさとりに入らしめんため

子^こをおもふ親^{おや}のなさけのふかくして

まねきの聲^{こゑ}におどろかれけり

迷^{まよ}ひてし子^こらをミオヤのみもとにと

攝^{をさ}めましぬる聖旨^{みせめ}とはしる

みむねとはやみちにまよ子^こらがために

すくひましぬる光^{ひかり}なりけり

子^このためのミオヤの聖旨^{みせめ}にまかせては

我^{わが}はからひもうちすてぞする

子^こを思^{おも}ふミオヤの聖旨^{みせめ}我身^{わがみ}にも

かゝりけりとはかつてしらじな

大^{おほ}ミオヤのみなをよばひて頼^{たの}む子^こを

むかふミオヤのありがたきかな

なむと云^いふ子^このまことにぞあみだ佛^{ぶつ}と

ミオヤのみむね子^こに賜^{たま}ふなれ

なむとたのむ子^こにたまふなりあみだ佛^{ぶつ}の

ミオヤのみむね（　　）

子^こをおもふ親^{おや}のみむねは子^こらが爲^ため

親^{おや}のすべてを賜^{たま}ふためなり

かぎりなき光^{ひかり}と永遠^{とこは}の壽^{いのち}とも

子^こ等^らもみおやに同じ^{おな}（　　）

大^{おほ}ミオヤは子^こらを招^{まね}きて永^{えい}遠^{えん}の

世^よをつがさんみむねなりけり

かぎりなき光^{ひかり}の中^{なか}に永^{えい}遠^{えん}の

つきぬ壽^{いのち}に攝^{おさ}めますなり

いかにしてたよるべきかしらざりき

ミオヤのちかひ聞^きかぬむかしは

あみだ佛^{ぶつ}と我^{われ}名^なをよびてたよれとの

ミオヤのちかひきゝしうれしさ

大^{おほ}ミオヤの御^み名^なをたゝへてたよる子^こを

すくひますとのちかひたのもし

人を世に出すもつひにとこよなる

みもとによばんためぞとはしる

大ミオヤの聖旨しらせんためにとて

この人の身を賜ひけるらん

大ミオヤのつひのみむねをしらなくば

人と生れし甲斐やなからん

かくばかりかぎりをつくして活すさへ

つひのみむねにかなはしめんと

人の世もつひのみむねにかなはしむ

この學屋としるやしらずや

本願ほんぐらんとは大ミオヤおほが子等こもを招まねきて

みむねをつがせん本願みこころを云ふ

大ミオヤおほの子等こらを子ことして（　　）

世よをつがせんとの聖旨みむねなりけり

大ミオヤおほの限きはなき光ひかりと壽いのちとの

御みもとに攝おさめます聖旨みむねなり

世よの子等こらを三世よの佛ほとけと同じおななる

覺さとにせんとの聖旨みむねなりけり

またもなきさとの身みとしとこよなる

幸さいちと榮さかえにみたしめんとて

大ミオヤは子等を撮めて永久に

無爲の都に向ひますなり

大ミオヤは子等を撮めて自己と同じ

覺りにせんの聖旨なりけり

かはるがはる三世の佛の出でますは

ミオヤのみむね知らせんがため

大ミオヤはついの目的を示すため

法藏菩薩 出ましてけり

五たびの劫波に思ひつくせしも

子を思ふ親の情なりけり

眠りさめ闇夜は明けて（　　）

常世の春はのどけかりけり

大ミオヤの御もとにかへし子のために

すべてをゆづらん聖旨なりけり

大ミオヤのみむねの中に撮めすば

いかでみむねのやすみますらん

天地のよろづの備へ誰がためぞ

子等を育てんみむねならすや

大みむねのまことの光に照らされて

数ならぬ身と今は知りける

數ならぬ己なりとは知りながら

したり顔なるわが思ひかな

今はばたうたがふべくは候はず

あなたはまたく我が御親なり

親なくて子のあるはづはなきものぞ

まことのミオヤ誰か知らずや

大ミオヤを親と知らねば人の生を

たゞいたづらに過しやすらん

天地のよろづの備大ミオヤの

子等を養ふ家庭と知られき

さまよひてミオヤのもとを離れたる

子のゆく末のあはれとは知る

大ミオヤを知らぬ昔をかへりみて

我身ながらも恥かしきかな

大ミオヤを知らざればこそ我ばかり

もの知りがほになりやしつらん

捨つるとも取るとも今はわづらはじ

たゞ大みむねにまかせたる身は

けがれたる己なりともおぼへず

みむねのひかりうけぬむかしは

大^{おほ}みむねにそむきて罪^{つみ}にけがれたる

身^みをかながへてはちらひにける

かくばかり罪^{つみ}とが深^{ふか}き我^{われ}だにも

すてぬミオヤのなさけふかけれ

罪^{つみ}とがを左^さとも思^{おも}はで我^{われ}がほの

我^{われ}ほどわるきものやあるらん

罪^{つみ}とがも佛^{ほとけ}の智^ち慧^ゑにあふ時^{とき}は

燈^{ともし}す光^{ひかり}のあふらとはなる

大^{おほ}ミオヤの恩^{めぐみ}寵^{ごう}の乳^ち房^{ぶさ}なかりせば

靈^{きよ}きはぐみはいかであるべき

あみだ佛を念ふころに恩寵の

靈き乳味はのみまつるなり

いかなりし味とは知らね恩寵の

乳にはぐまる靈子の身なりけり

あどけなき子のうれしきはいだき合ふ

母の笑顔を見るばかりにぞ

己れをもわすれて母にいだきあふ

子のうれしさを何にたとへん

母と子のかたちはふたつにわかれても

情は同じ（

）

可愛ける子の苦しみをみる母の

むねのなやみはいかばかりかも

可愛けるひとのかなしみ我むねに

ひときわたりぬ同じなさけに

喜びもまた悲しみもわかつてん

同じ情に愛しあふ身は

あこがれて天つみそらを眺むれば

心に見ゆる慈悲の面影

あくがれし我身もいまはおぼほえず

こがねのみかほ見まくほしさに

いづこにかましますとてかしら雲の

あなたの空にあくがれにける

さしのぼる月の面かげ見えぬ間は

戀の闇路にまよひしものを

雲はれて月の御面を見るまでは

戀のおぼろにさまよひにけり

いつかはた必ず遇はんものながら

まだ見ぬほどは闇路なるかな

かぎりなく天つみそらにあくがるゝ

ふらとの昔おもひやらるゝ

くれ(き)のふらともか(や)戀しけん

みそらはるかか雲のあなたに

あかつきのまぶしきばかりかやける

さま見るときはうれしかりけり

天晴れてまぶしきばかり輝ける

朝日のみかほをふしおがむかな

○

無量光

世の中なかにありとあらゆるものとして

量はかりりなき身のわかれわかれぞ

天地あめつちのなべてのものにことごとく

光ひかりはなてるみほとけいます

世の中なかの心こころのうちにうつること

あらゆるものに佛ぶつはまします

いかばかりこまかなものもみほとけの

いまさぬほどのものやなからん



聖賢佛

十方多生而乃

法報身月本地

獨有緣妙

以師子

聖賢光

頂禮

塵々のかずもつくせぬほとけとて

本はひとりのミオヤなりけり

天地にあらゆる物に一つだも

みのりにかゝらぬ物のありせば

こゝろとも物ともいまはおもほへず

たゞみひとりのミオヤにませば

みひとりのミオヤに出でし天地の

よろづはすべて分れ子にして

みひとりのミオヤの中なかのよろづにぞ

分わかれながらもはなれざりけり

かぎりなきよろづのものにまします

ほとけはつねに光ひかりはなてり

あめつちのよろづの中なかにまします

ほとけは常つねにのりを説ときます

いかばかりこまかに分われたるものも

其そのまゝ本もとのミオヤなりけり

限かぎりなき三世みよの佛ほとけのかず／＼は

一つミオヤの分われなりけり

二身しんもまた三身しんも四法身ほふしんも十佛じぶつも

一つミオヤの分われなりけり

三身もまた十身も塵沙身も

一つミオヤの異名なりけり

かすかぎりなきほどまでに分れても

同じ一のミオヤなりけり

如來藏

底ひなき如來藏よりわきいづる

森羅萬象はかぎりつきせじ

底ひなきおほみむねより湧出る

よのくさくはかぎりつきせじ

法の身の御手にかゝらぬ物やある

日月星震山河大地に

清き霄ふりさけみればいよ遠し

かしこみてたゞビルシヤナほとけ

いや高くますく遠き天つ空

マカビルシヤナのみむねあほがむ

年ごとに花よ月よとくりかへし

子らをなぐさむおやのなさけか

底ひなき如來藏より我胸に

わき出る泉はつきることやある

春の花秋のもみちも實相の

すがたとしればゆかしかりけり

おくふかき眞如のすがたしりたくば

はるのさくらに秋の夜の月

目に見へぬ眞如のすがた見ほしくば

朝日にほふ山ざくら（ ）

實相の眞如の月を見ほしくば

心のまなこまづひらけかし

實相のすがたいかにと人間はと

あさひにほふ山ざくらかな

佛（ ）なる心の眼開きなば

森羅萬象當位即妙

色も香も無非中道と聞からは

梅も櫻も（ ）實相

情なき草木とかつておもひにき

こゝろあればさく花としらずに

いかばかりこまかなる草までも

ミオヤの御手にかゝらぬはなし

常に説くみのりの音さへ心なく

空吹く風と思ひやるらん

いづこにかみのり説かざる處やある

心して聞け松風の音

びるしやなの常に説きます法の音は

心の耳に聞かぬ日もなし

心して聞けば空吹く風さへも

甚深微妙の法のひときぞ

びるしやなのすがたは天に日月星

地には草木鬼神天

端もなく底ひもなくて天地の

よろづにわたる摩訶びるしやな佛

不思議かなげに不思議なるびるしやなの

わざほど不思議なるものはなし

びるしやなはいづこの人と思ひしに

我大ミオヤの御名にぞ有りける

びるしやなは天地よろづの身を分けて

數へつくせぬすがたとはなる

我もまたびるしやなの子と聞くからは

いつか佛に成らざらめやは

アミーバの微小の身にもへりくだり

げにびるしやなの不可思議にこそ

仰あがぎていよく高た遠かきびるしやなの

みいづのほどは測はかれざりけり

びるしやなの聖み旨めがね仰あががむひれ伏ふして

たゞかしこみてナムと云いふのみ

いと小ちき此このつちくれに受うけ身みも

まかびるしやなのみ子こにぞありける

かたちこそ此このつちくれの寄よりものも

心こころは毘ひ盧ろのみ末すえなりけり

いと微ひなるアミーバとまでへりくだり

されどもまた本もとのビルシャナ

萬代にくりてもく盡きざるは

如來藏より出るさとりなれ

さとりにには盡る期とてなかるべし

如來藏より湧出でくれば

淺ましき此のつちくれによるものも

毘盧のみ末とたれかしらまし

永遠のひかりを今は認めにき

これ永遠の歸する處ぞ

心なき人はいかにか思ふらん

このあめつちのふかきめぐみを

あめつちもみな大ミオヤのみむねより

はからひませるものにぞありける

ミオヤとは天地よろづのりをもて

我身となせる身にぞありける

日の光りいかづちの音地のめぐる

なにかは法の身ならぬものぞ

法の身のちからしなくばいかにして

あかねさす日の光りやあらむ

今のはた疑ふやみも晴れにけり

永恒の光の中に住せば

うたがひの雲はれわたりさやかなる

月の光をみるぞうれしき

本よりも天には雲のなきものを

わがまよひにぞ覆はるゝなれ

大ミオヤは宇宙の心にましまして

十方世界を照しますなり

とこしへに光照さぬ時はなし

夜と日といふもしやばになぞらへて

かぎりなき三世の佛のかすくは

ひとりのミオヤの異名とはしれ

釋迦、藥師、地藏、彌勒といふものゝ

ひとりミオヤの異名とはしれ

世の中に眞理てふるを尊とむは

ミオヤのひかりあればなりけり

大ミオヤの聖旨しなくば世の中に

眞理てふる法はあらじな

阿彌陀佛は神聖正義恩龍の

光を衆生の心に照らしつ

阿彌陀佛智慧の光を十方に

常に照して世をすくひます

萬德の光の名號を稱へては

こゝろにみだのみむねみたさん

一心に光明の名號稱念せば

いつしか同化せらるるものぞ

ひしくと阿彌陀佛に心をば

投じていまは無我となるなり

阿彌陀佛の朝日の光まばゆくも

金剛石にうつりかゞやく

聖名を云ひ心し彌陀となるときは

天地法界皆ほとけなり

一心を金剛石と化する時

みだの日光はうつりかゞやく

我てふまよひの闇もはれぬべし

あみだ佛の朝日のほれば

永遠に照るみ光をしらざるは

無明の眠ふかければなり

聖名の聲に喚び起されて醒めぬれば

オミトフの日は常に照ります

日は出でて三竿も高く照らせども

まださめやらぬ春の夜のゆめ

一向いっかうに光明くわうみやう名號なごうを稱とへては

おのが心こころも光ひかりとはなれ

オミトフの永遠とこほのロゴスはひたすらに

念ねんする心こころにあらはるゝなり

永遠とこほのロゴスいまさぬ處ところやある

信しん念ねんいたる處ところに現ひせん

如來たゝみは法界ほふかい身にましますば

あふぐ衆生しゆじやうの心想こころにぞ入いる

一心しんに如來たゝみを想おもふてやまざれば

此心こころこれ佛ほとけとはなれ

一心に如來を想ふてやまざれば

此心これ佛つくれる

一心に如來を念ふてきはみには

此心これ佛なりけり

心にはこれとてすがたなかりけり

想ふからにぞ佛とはなる

此心如來に化す時は

天地法界無碍光にして

オミタフの心の中は宇宙間

いづこか淨き御國ならすや

オミタフに同化の心を外にして

浄土ねがふは愚かなりけり

オミタフの光に靈化する時は

此處が泥洹の都なりけり

オミタフの光の睡腫となる時は

無爲泥洹の都なりけり

從來の己を捨てオミトフの

心の中に復活れかし

赤き眼鏡をもて見ば萬物みな赤し

心からこそさまぐりにして

天にも地にも本より罪もとがもなし

我心こそ罪は造らめ

世の中に心てふものなかりせば

善惡邪正はあらざるものを

眞身の如來は永遠のロゴスにて

不生不滅の眞理なりけり

永遠の靈の力ましませば

信念の心にぞ顯はる

絶對の大靈にます法の身は

念佛衆生の心にぞ在ます

靈化

オミトフは圓實性を備へては

我らに與ふ聖旨なりけり

數ならぬ己をすて、萬徳の

聖心に換へて給はる

ぬば玉の闇の心を量りなき

光と換て給ふ聖旨

罪とがのわろき心を最靈の

聖きに換へて給ふ（ ）

染汚^{りげ}てし業識^{ごふしき}を滌^{そぎ}ぎいと聖^{きよ}き

聖旨^{みづね}に換^かへて給^{たま}ふ（　　）

苦^{くる}るしみと惱^{なや}みの心^{こころ}オミトフの

平和^{へいわ}妙樂^{めうらく}と換^かへて給^{たま}はる

安^{やす}らけきミオヤのみむねたよらずば

いかで安^{やす}けき世^よを過^{すご}さなん

おほミオヤと共に住^すむ身^みはとことばに

安^{やす}らけかりし世^よには成^なるなれ

○

無邊光

世を照らすさとりうみの海はそこひなく

ほとりも知らぬ光なりけり

またちなきあのく菩提だいの日は明あけく

四智ちの光ひかりは常とこにかゝやく

大おほミオヤ 同おなじく三身さんを一ひととし

四智ちの光ひかりは圓まどかに照てらす



不道先佛

如來無邊乃光明覺

四心妙智乃すに

通妙法号

思しくん

生乃不見を

明きう

永しへに照らせるこゝろのみひかりは

世にわたらざるくまもなからん

圓かなる鏡のなかにうつらざる

影は一もあらざら（　　）

圓かなる智慧の鏡に宇宙の

よろづはうつる影に有ける

幾（千年）経てもとき（は）にくもらぬは

佛の智慧のかゞみなりけり

はてもなくかぎりもなきは圓かなる

佛の智慧のかゞみなりけり

かぎりなき宇宙はミオヤの圓かなる

智慧のかゞみと誰かしらまし

圓かなる智慧のかゞみに顯はれし

我らはすべて影像にぞ有ける

かすかぎりなきまで立てる浪々も

一つ海原の水にぞありける

いかばかりわかれゝに立浪も

一の海を離れざりけり

一如なる智慧の海原（　　）

かすなきまでも波はわかれつ

平等びやうどうの一如にょの海うみにいかなれば

わかれゝに波なみは立たつらむ

かはらざる水みづもわかれてさまゝに

あだ波なみとして立たちさわぐかな

立たちさわぐ浪なみこそ風かぜにより（　　）

もとは一如にょの海水かいすいにして

我われてふ我われはたれかみとむらむ

本もとは一ひとの智慧ちゑにぞありける

物ものと云いひ心こころと云いふも二つなし

一つ觀念くわんねんの内うちと外そとなり

天地あめつちのよろづの物ものと現あらはる々も

わが觀念くわんねんのすがたにぞある

わが觀念くわんねん外そとに日月星辰じつげつせいしん

山河大地さんかだいぢのすがたとは見みゆ

阿頼耶あらいやてふ觀念くわんねんのすがた天地あめつちの

よろづの物ものと變かはりてぞ見みゆ

外はとに天地内てんちうちには末那意識まないしぎ

五識しきとなるも一つあら耶やぞ

外界ぐわいがいのよろづも心こころの百法ほふも

一つあらやの變現へんげんにそも

六のみち心こころも身からだもさま／＼も

一つあらやの異熟いじよくなりけり

みほとけの圓まどかなる智慧ちゐのみかゞみは

ほとりもなく永恒とこはに照てります

圓まどかなる智慧ちゐの鏡かきみはとこしへに

十方三世じふほうさんぜに照てりわたるなり

圓まどかなる智慧ちゐの鏡かきみは十方三世じふほうさんぜの

依正色心影像いしょうしきんやうざうにぞありける

宇宙は絶對無限圓かなる

大觀念の智慧の鏡ぞ

(一) 依正色心の影像も

心の鏡を離れてやある

此地上に住む我々も圓かなる

鏡のなかの影像にぞ有ける

我等とて一大觀念中のもの

我觀念とて外にあらじな

わが觀念底もきはみもなかりけり

十方三世にてりわたりてぞ

わが觀念圓な鏡に（ ）なれば

即ち大圓鏡智なりけり

わが觀念端も底ひもなかりしは

圓な鏡につらなればなり

座をしめて心を靜かに觀ひ見よ

十方三世にわたる心を

仰ぎつゝ觀想を天にすみぬれば

我や空とのへだてなきまで

はれわたる空にこゝろもすみぬれば

我や空やのわけあへぬまで

平等性智

天地のよろづにすぢみちのたゞしきは

自性の智慧の有ればなりけり

よろづに天つみのりのとゝなふは

内に性智のあればなりけり

世に眞理てふことの行はるゝは

自性の光あればなりけり

十方の三世にわたりて永しへに

かはらぬものは眞理なりけり

自性智が相對の中にあらはれて

因縁因果の律となるなり

因縁と因果の律は平等の

性智が相對に律（一）にあり

平等の性智の海に相對の

差別の波は立つものにして

差別なる浪とて本の平等の

性智の水をはなれてはなし

複雑の極なき事々物々に

平等の性の貫さざるはなし

草も木も自己に各々自己を

をさむる自性存ざるはなし

平等の眞理は公平無私なれば

わが分別はゆるさざりけり

我てふわがはからひを取りのぞき

自性ばかりは眞理なりけり

絶對の理性の基礎に相對の

世に因縁の律とあらはる

平等の性智を根と爲す自我に

自覺しぬれば眞理あらはる

相對の因縁因果超絶し

平等性智は絶對の眞理

性智とは絶對の靈が自己にありて

自己を照らせる鏡なりけり

天地の萬にわたりて（　　）

自己を制する理性具はる

草も木も自己に萌芽て枝條

葉とも花（　　）實を結ぶなり

萬物に自爾の理系の存するは

之れぞ性智のあればなりけり

相對の物には相對の理あり

絕對には絕對の眞理あり

萬物に自然法爾の理のあるは

性智の上に立てばなりけり

天則の秩序は自然の萬物に

理系の則があればなりけり

絕對の眞理の上に立て本然の

自性を眞理の性とす

意識なき植物にさへも自からに

萌發の具はりぞする

世のなかのすべてのものは悉く

自己に制する性は具はる

妙觀察智

十方の三世諸佛を攝めます

あみだほとけは我にまします

われはたゞあみだ佛にいにけり

あみだ佛は我にまします

我心あみだ佛に入りぬれば

十方の佛の中にやあらん

十方じゅうほうを普あまねく照てらす阿彌陀佛あみだぶつ

入いらず來きたらずわが胸むねにます

阿彌陀佛あみだぶつを念おもふ心こころのますかゞみ

かぎりなきまで照てりわたるなり

十方じゅうほうの三世さんぜにわたる阿彌陀佛あみだぶつ

我心わがこころにぞ常つねにまします

阿彌陀佛あみだぶつに献ささげし身みには我われはなし

たゞ阿彌陀佛あみだぶつのまことばかり

阿彌陀佛あみだぶつと心こころを無礙むげの光明くわうみんに

うつして今いまは我われなかりけり

十方じふぱうの諸佛しよぶつにおのゝ十方じふぱうの

諸佛しよぶつが相即さうきふ相入さうにふ

あみだ佛ぶつのこゝろをおのがこゝろとし

底そこひもなくかぎりもなし

十方じふぱうの三世さんぜを照てらすあみだ佛ぶつ

其そのまゝ我われにゆづりて給たまふ

阿彌陀佛あみだぶつミオヤに在あせは子この爲ために

すべてを舉あげてゆづりますなれ

○